

「MFB-2000」使いこなしメモ

2004. 10

◎MFB量、特性補正量とも、ツマミを右に廻すほど大きくなり信号レベルは下がる方向に働きます。

常識的な「右に廻すとレベルが上がる」とは逆の関係ですのでご注意ください。

MFB量、特性補正量は「スルー」でのレベルと比べ「±2dB以内」程度に収めるのがポイントです。

センサー帯域は狭くする（左に廻す）ほどフラットネスが出しやすくなりますが、多少特性が乱れても、帯域を広くとった方が音が良くなる場合が多いようです。

この場合は音質を優先して下さい。

☆ヒント！

MFB量、特性補正量のツマミは僅かに動かしても相当に音が変わってしまうことがありますので通常はアクリルパネルで塞ぐようにしていますが、頻繁に調整したい時はこのふたつのツマミをセロテープ等で橋渡しするように貼ると簡単に仮固定できます。

◎調整用レベルメーターは対数範囲を広くとってありますので調整の基準は「0dB」以外でも構いません。深夜など、大きな音を出したくない時は「メーター感度を最大にセットし、-10dBを基準」にする方法がおすすめです。

◎調整用信号発生器の目盛は20, 100Hzではかなり正確に合わせ込んでありますが、他の周波数は「目安」とお考え下さい。

この信号は、平均的なレベルを読みやすくするため軽い周波数変調を掛けてあります。

◎本体のアースを取る時は、接続相手に依って微妙に音が変わることがありますのでご注意ください。（電源コンセント、プラグの極性に関しても同様です）

弊社の実験結果では、本機のアースターミナルとパワーアンプの筐体（ピンジャックのアース側ではない…にご注意を！）を結ぶのが音質的に最良なことが多いようです。

◎接続ケーブルに関して

本機とプリ、パワーアンプを繋ぐピンコードは出来るだけ良品をお使い下さい。

一例としてパワーアンプ1台でのシステムでは、最初に次の点をご確認下さい。

本機を接続する前の音と、本機を接続しスルーの設定での音を聴き比べてみてください。

仮にそれまでの音と比べて極端に鮮度が落ちるようでしたら追加した接続ケーブルに問題がありトータルでは期待するほどの改善効果が得られない可能性があります。

弊社では本機と良質のケーブルの組合せでは元の音と殆ど遜色のない音質が得られることが確認できています。子細は弊社にご相談下さい。

◎機密性の良い部屋でドアを勢いよく閉じるとコーン紙が大きく偏位することがありますが、これはセンサーがその音圧を検知して音圧変動を抑えようとするMFBの作用そのもので一般的には全く問題ありません。但し、センサーに触れるような大きな偏位がある時は、センサーを更に離すかドアをゆっくり開閉するよう工夫して下さい。

◎マルチアンプシステムの場合

1 kHz以下のユニットに対してMFBは有効です。

MFBを掛けるチャンネルのデバイダーとパワーアンプの間に本機を組み入れます。

「スルー」とレベル差がないよう合わせ込むという調整原理もシングルアンプ式の場合と全く同じです。

◎マイクユニットは強く固定されてはいませんが意外と音に対する影響は軽微です。

これが、音圧を拾うマイク方式の大きなメリットのひとつです。

◎本機のようなMFBシステムはアナログフィルターの集合体との見方もできます。

取説では、基本ローパス回路のターンオーバー周波数(500Hz)以外の数値は公表していませんが他のフィルターの動作周波数も参考にまでに以下に記します。

★センサーの帯域制限フィルター

200, 300, 450, 550, 650Hz, 6kHz (6dB/oct)

基本的には帯域は広めに設定した方が効果が大きいわけですが、広すぎると発振したり大きなピークが出来たりしますので、その時は制限周波数を下げてください。

右端の6kHzという設定は、SP内蔵のネットワークにより1kHz以上の信号が充分に遮断されている場合に適した設定です。(クロスオーバー周波数が数100Hzの場合など)

クロスオーバー周波数が1kHz以上の場合は550, 650Hz辺りの設定の方が安定な動作が期待できます。

★特性補正フィルターについて

本アダプターの中では、ピークを抑えるディップフィルターの役割をしています。

フィルターのディップ周波数そのものではありませんが、およそ以下の周波数のピークを抑える働きがあります。(ユニットにより多少変わってきます)

300, 370, 450, 560, 680, 820Hz

実際のSPユニットではある周波数で急に位相特性が変わるポイントがあるため、f特の細かな凹凸が出来きますが、ここまでの補正はユニット毎にも違い現実的ではありません。

★入力部のローカットフィルターの特性は12dB/oct、表示は-3dB周波数です。

その他、参考データ等

◎センサーの振動板からの距離15mmというのは、1kHzの信号に対して約16deg(500Hzでは8deg)の位相遅れに相当します。

アダプター内で十分な位相管理を行っていますので、多少の誤差(±5mm程度)は全く問題ありません。

◎センサー部に大きなショックを与えないように！衝撃によりセンサーのフラットネスが悪化する場合があります。センサーはできるだけ丁寧に扱って下さい。

◎音が出ない。こんな場合は…？

調整ポジションになっていませんか？ 調整用発振器のボリュームを絞っていると、なかなか気付かないケースがあります。

電源オフの時も「スルー」ポジションで音を確認できます。

さらなるグレードアップは

前述しましたがピンコードは非常に重要です。

（これはオーディオ一般の常識ですが再度確認して頂きたいことです）

弊社がお薦めするのはWBTプラグ、純銅単線、綿シース（網袋）を組み合わせたもので、商品ではなく体裁も良くありませんが、ご希望がありましたらサンプルの貸し出し、並びに同品を実費（本機のお客様には1.2m物で¥22k）で作成致します。

「ともかく抜けのよい音」を追求されている方には是非ともお薦めです。

この機会に御検討下さい。

なおMFB-2000Aタイプの場合、定価の差額のみ（¥90,000）でBタイプにバージョンアップ致します。